

甲虫ニュース COLEOPTERISTS' NEWS

No. 65 September 1984

日本産水棲甲虫類の分類学的覚え書, I*

佐藤正孝

日本の水棲甲虫類に関しては、いろいろな知見が集約され、かなりの程度まで判ってきたといつてよいが、まだ分類学的に多くの問題を内在している。筆者は、最近日本近隣地域の多くの標本を検査する機会を得たり、1981年にヨーロッパの幾つかの博物館を訪れ、主として日本産種に関連ある模式系列の標本を調べたりした結果、新しく処置しなければならない分類学的知見がいろいろと出てきた。さらに、まだ新しく記録しなければならない種もあつたりする。そこで、それらについて新しい取り扱いなり、新しい記録を順次報告していきたいと思う。

Family Haliplidae

コガラシミズムシ科

この科は、日本から *Pelto-dytes*, *Haliplus* 2属が知られ、戦前では滝沢 求(1931)と神谷一男(1936)が総説を書き、戦後は中根猛彦(1963)がそれらを正すかのように幾つかの新種を書き、図説したりした。それでかなりまとまっているかのように見える。しかし、*Haliplus* 属については、やや混乱しているようなので、つぎのように学名を一応整理してみた。といつても、これですべて片付いた訳ではなく、琉球列島を含めてまだ少々未解決の問題は残つている。

Haliplus (Haliplus) japonicus SHARP

クビボソコガラシミズムシ

Haliplus japonicus SHARP, 1873, Trans. ent. Soc. London, 1873: 55 (Nagasaki).—SHARP, 1884,

Trans. ent. Soc. London, 1884: 440.—RÉGIMBART, 1899, Ann. Soc. ent. France, 68: 191.—ZIMMERMANN, 1924, Ent. Blätt., 20: 75.—TAKIZAWA, 1931, Ins. Mats., 5: 140.—KAMIYA, 1932, Kontyû, 5: 203, pl. 6, fig. 3.—KAMIYA, 1936, Fauna Nippon., 10 (8-6): 42, fig. 23.—KAMIYA, 1943, J. Shanghai Sci. Inst., 13: 457.—ZAITZEV, 1953, Fauna USSR, 4(58): 56.

Haliplus kamiyai NAKANE, 1963, Fragm. coleopt., (6): 25(Tokyo).—NAKANE, 1963, in Icon. Ins. Jap. Co. nat. ed., 2 (Coleopt.): 55, pl. 28, fig. 5. Syn. nov.

Haliplus ruficollis: OHKURA, 1954, in Colour. Ill. Ins. Japan, Coleopt.: 145, pl. 52, fig. 2.

Haliplus minutus: OHKURA, 1968, in Colour. Ill. Ins. Japan, Coleopt., Enlarg. Rev. Ed.: 203, pl. 64, fig. 2.

分布: 日本(北海道, 本州, 四国, 九州), 中国。

中根(1963)は、かつて神谷(1932, 1936)が図示したような翅鞘中央に十字形の大きな紋をもつ個体を *kamiyai* とした。しかし、点刻, 翅鞘の斑紋, 体形などはいろいろ

と変化が多いので、それは *japonicus* の変異の範疇に入るものと考えられる。

Haliplus (Haliplus) minutus TAKIZAWA
チビコガラシミズムシ

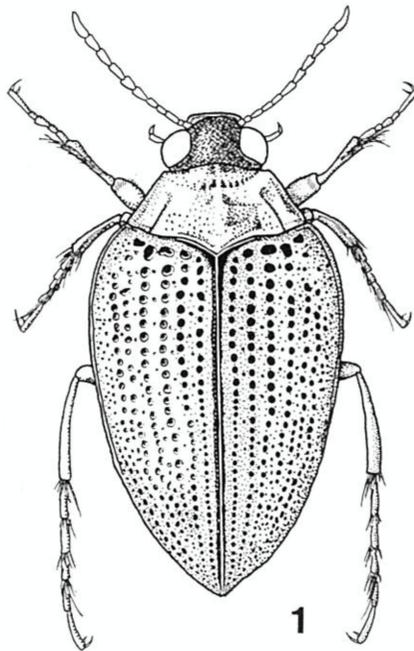


Fig. 1. *Haliplus (Haliplus) japonicus* SHARP クビボソコガラシミズムシ

* M. SAT, Taxonomic notes on the aquatic Coleoptera of Japan, I

Haliplus minutus TAKIZAWA, 1931, Ins. Mats., 5: 140, fig. 2 (Sapporo). —KAMIYA, 1936, Fauna Nippon., 10 (8-6): 45, fig. 24.

Haliplus brevior NAKANE, 1963, Fragm. coleopt., (6): 25 (Shikatsumura near Nagoya). —NAKANE, 1963, in Icon. Ins. Jap. Col. nat. ed., 2 (Coleopt.): 55, pl. 28, fig. 7. Syn. nov.

Haliplus sharpi: KAMIYA, 1932, Kontyû, 5: 207, pl. 7, fig. 8.

Haliplus ruficollis: KAMIYA, 1940, Rept. limnobiol. Surv. Kwantung Manchoukuo: 114 (in parts).

分布: 日本 (北海道, 本州)。

中根 (1963) が唯一の標本に基づいて師勝村 (名古屋市郊外) から記載した *brevior* は, 原色大図鑑準備のため急いで書かれた様子から原記載は非常に短い。そこで図鑑に示された全形と合せて判断すると, その特徴としての体形, 前頭の疎な点刻, 前胸背の短い縦条などは, *brevior* がすでに滝沢 (1931) によって札幌から記載されている *minutus* と同じ種に相当することを示している。

いっぽう神谷 (1932) は, 本種を *sharpi* として図示したり, さらに後 (1940) には *ruficollis* のシノニムと考えたりもして, 取り扱いが混乱している。なお, 名古屋付近では環境が悪化して, もうこの種を採集することは不可能に近く, 筆者も長年名古屋に住みながら未だに標本を検査する機会を得ないでいる。

Haliplus (Liaphlus) eximius CLARK

キイロコガシラミズムシ

Haliplus eximius CLARK, 1863, Trans. ent. Soc. London, (3) 1: 418 (Deer Is., Tsau-li-an, Korea). —RÉGIMBART, 1899, Ann. Soc. ent. France, 68: 190. —ZIMMERMANN, 1924, Ent. Bätt., 20: 132. —TAKIZAWA, 1931, Ins. Mats., 5: 140. —KAMIYA, 1936, Fauna Nippon., 10 (8-6): 42, fig. 20. —GUIGNOT, 1950, Rev. franc. Ent., 17: 97.

Haliplus hiogoensis KANO et KAMIYA, 1931, Trans. Kansai ent. Soc., (2): 1 (Hiogo, Kô-tôen). —KAMIYA, 1936, Fauna Nippon., 10 (8-6): 44, fig. 22. Syn. nov.

Haliplus emmerichi FALKENSTRÖM, 1936, Ling. Sci. J. 15: 79 (Szechwan, Nitoutatsienlu).

Haliplus simplex: KAMIYA, 1932, Kontyû, 5: 206, pl. 7, fig. 7.

分布: 日本 (本州, 四国, 九州), 朝鮮半島, 中国, 台湾。*H. eximius* は, 朝鮮半島の Deer Is. から記載された種であるが, 大英博物館に所蔵されているタイプ標本を, 日本から記載された *hiogoensis* に相当する標本と比較してみた結果, 明らかな区別点を見出し得なかった。そこで後者をシノニムとして取り扱いたい。なお, 神谷 (1932) の記録でた *simplex* は本種の誤りで, GUIGNOT (1950) は

emmerichi も本種と同じと考えている。

Haliplus (Liaphlus) kotoshonis KANO et KAMIYA

コウトウコガシラミズムシ
Haliplus kotoshonis KANO et KAMIYA, 1931, Trans. Kansai ent. Soc., (2): 2 (Kotosho, Formosa).

Haliplus sp., M. SATÔ, 1960, Kontyû, 28: 285. 分布: 琉球列島 (宝島, 奄美大島, 石垣島), 台湾 (紅頭嶼=蘭嶼)。

原記載以降記録がなく, 神谷 (1936) は *simplex* (実際は *sharpi* に相当する) と同じであると考えていたようである。しかし, 琉球列島で得られた標本は, *kotoshonis* に同定できるので新記録種としてここに報告する。確かに *sharpi* とはやや似てはいるが, 斑紋の出現様式が異なり, 体側に丸味があり, 前胸背の点刻がやや密であることなどで区別できる。なお, 翅鞘の斑紋には, かなりの変異が認められ, 基本的には基部の横紋を欠く。しかし, 時として基部に横紋の現れる個体もあるが, 側方前・後の円紋は退化的である。

檢視標本: 1 ex., Takara-jima, Tokara Is., 2. vii. 1960, M. SATÔ; 2 exs., ditto, 20. vii. 1961, Y. HAMA; 6 exs., ditto, 2. vi. 1962, M. SATÔ; 1 ex., Shin-mura, Amami-Ôshima, 19. vii. 1954, S. HISAMATSU; 1 ex., Ishigaki-jima, 5. vi. 1970, T. HOZUMI (New to the fauna of the Ryukyus).

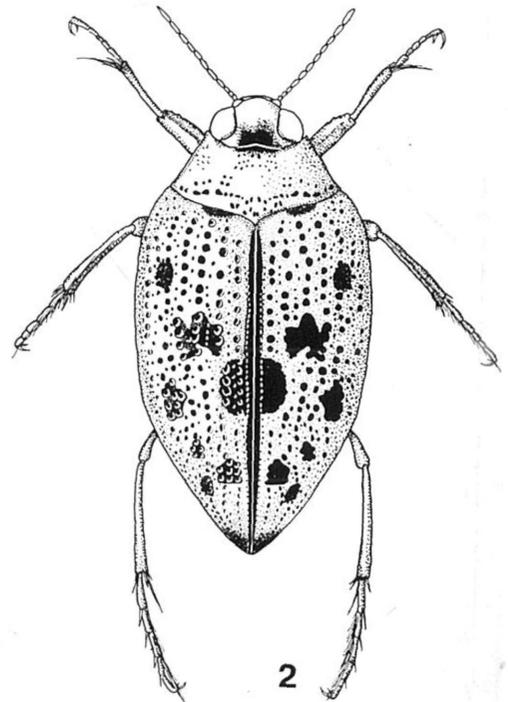


Fig. 2. *Haliplus (Liaphlus) ovalis* SHARP
ヒメコガシラミズムシ

***Haliplus (Liaphlus) ovalis* SHARP**

ヒメコガシラミズムシ

Haliplus ovalis SHARP, 1884, Trans. ent. Soc. London, 1884:440(Niigata, Tokyo, Yokohama, Kashiwagi).—ZIMMERMANN, 1924, Et. Blätt., 20: 74.—TAKIZAWA, 1931, Ins. Mats., 5: 141.—KAMIYA, 1932, Kontyû, 5: 205, pl. 7, fig. 6.—KAMIYA, 1936, Fauna Nippon., 10 (8-6): 46.—ZAITZEV, 1953, Fauna USSR, 4 (58): 71.

Haliplus sharpi: NAKANE, 1963, in Icon. Ins. Jap. Col. nat. ed., 2 (Coleopt.): 55, pl. 28, fig. 3. 分布: 日本 (北海道, 本州, 四国, 九州)。

翅鞘の斑紋にはかなりの変異があり, 中根(1963)の図示した *sharpi* は大英博物館で検したタイプ標本 (横浜) の型に近く, この種の変異の幅の中に入るものであり, かつ真の *sharpi* はまったく別の種である。この種は中国大陸にも分布しているが, 別亜種 (subsp. *sinicus* BALFOUR-BROWNE) として区別されている。

***Haliplus (Liaphlus) sharpi* WEHNCKE**

マダラコガシラミズムシ

Haliplus sharpi WEHNCKE, 1880, Stett. Ent. Z., 41: 74 (China).—RÉGIMBART, 1899, Ann. Soc. ent. France, 68: 189.—ZIMMERMANN, 1924, Ent. Blätt., 20: 131.—TAKIZAWA, 1931, Ins. Mats., 5: 142.—ZAITZEV, 1953, Fauna USSR, 4 (58): 75.

Haliplus tsukushiensis YOSHIMURA, 1932, Mushi, 5: 102 (Kashii, Chikuzen).—NAKANE, 1963, in Icon. Ins. Jap. Col. nat. ed., 2 (Coleopt.): 55, pl. 28, fig. 4.

Haliplus simplex: KAMIYA, 1936, Fauna Nippon., 10 (8-6): 48.—KAMIYA, 1940, Rept. limnobiol. Surv. Kwantung Manchoukuo: 114, fig. 3.

分布: 日本 (本州, 四国, 九州), 中国。

H. sharpi のタイプ標本を直接検する機会を得なかったが, SHARP, RÉGIMBART などの同定になる標本と日本で *tsukushiensis* としている種と比較したが両者は同一種と考えられる。神谷 (1936) が *simplex* とした類は, かなり混乱して用いられているようであるが, 記載と図から判断してこの報文中に示したシノニミックリストのように処理してみた。

学名を整理したついでに, 日本産コガシラミズムシ科の検索表を作ってみたので, 同定の便を考えて以下に示しておきたい。

日本産コガシラミズムシ科の属および種の検索

- 1(4) 翅鞘の後半に亜縫合線を有する。小腸枝の先端節は他節より長い。後基節は腹部第1~5節を覆い, 側縁は縁取られる。雌交尾器の左側片は縁毛を欠き, 先端に付属突起を具えない……………*Peltodytes* コガシラミズムシ属



3



4

Fig. 3. *Haliplus (Liaphlus) sharpi* WEHNCKE
マダラコガシラミズムシ

Fig. 4. *Haliplus (Liaphlus) kotoshonis* KANO
et KAMIYA コウトウコガシラミズムシ
(翅鞘斑紋の最もよく発達した型)

- 2(3) 頭頂に黒紋を有しない。翅鞘点刻列の個々の点刻は大きい。後基節の後縁は著しく突出する……………
…*P. intermedius* (SHARP) コガシラミズムシ
- 3(2) 頭頂に2個の黒紋を有する。翅鞘点刻列の個々の点刻は小さい。後基節の後縁はわずかに突出する……………
…*P. sinensis* (HOPE) シナコガシラミズムシ
- 4(1) 翅鞘に亜縫合線を有しない。小腸枝の先端節は他節より短い。後基節は腹部第1~3節を覆い, 側縁は縁取られない。雌交尾器の左側片は縁毛を有し, 先端に付属突起を具える……………*Haliplus* ヒメコガシラミズムシ属
- 5(8) 前胸背基部両側に短い縦条を具える。後脛節内側の剛毛列を欠く。(*Haliplus*)
- 6(7) 翅鞘は肩部が側方へあまり拡がらないので, 体は楕円を呈する。頭頂の点刻は密である……………*H. (H.) japonicus* SHARP クビボソコガシラミズムシ
- 7(6) 翅鞘は肩部が側方へ丸く拡がるため, 体はやや丸味を呈する。頭頂の点刻は粗い……………*H. (H.) minutus* TAKIZAWA チビコガシラミズムシ
- 8(5) 前胸背基部両側の縦条を欠く。後脛節内側に剛毛列を有する。(*Liaphlus*)
- 9(10) 翅鞘には黒紋を有しない……………*H. (L.) eximius* CLARK キイロコガシラミズムシ
- 10(9) 翅鞘には明瞭な黒紋を有する。
- 11(12) 縫合線に沿った黒色部は細く, 合着した中央の紋は円形であり大きくならない。翅鞘基部の横紋を欠く。体長約4mm……………

- …*H. (L.) ovalis* SHARP ヒメコガシラミズムシ
 12(11) 縫合線に沿った黒色部は太く、合着した中央の紋は方形で大きく斜め前方へ延び小紋に連なる。体長約 3.5 mm
 13(14) 翅鞘の黒紋は中央で明瞭であるが側方では退化的で、基部の横紋を欠く場合が多く、側方の基部および先端部の円紋および中央紋よりやや斜め前方の紋はあまりはっきりしない
 …………… *H. (L.) kotoshonis* KANO
 et KAMIYA コウトウコガシラミズムシ
 14(13) 翅鞘の黒紋は明瞭で、基部に横紋を有し、側方の円紋および中央紋よりやや斜め前方の紋がはっきりしている…………… *H. (L.) sharpi*
 WEHNCKE マダラコガシラミズムシ

Family Noteridae コツブゲンゴロウ科

Hydrocoptus (Neohydrocoptus) bivittis
MOTSCHULSKY

キボシチビコツブゲンゴロウ (新称)

Hydrocoptus bivittis MOTSCHULSKY, 1859, Étud. ent., 8: 44 (Colombo).*Hydrocoptus (neohydrocoptus) bivittis*: M. SATÔ, 1972, Anns. hist.-nat. Mus. natn. hung., 64: 143, fig. 1.

分布: 日本 (本州), 台湾, 中国南部, ベトナム, タイ, ビルマ, スリランカ, インド。

東南アジアに広く分布する種であるが, 最近台湾から YANO *et al.* (1984) によって記録された。しか

しすでに本州でも採集されていたもので, 日本新記録種としてここに報告する。

体長 3 mm。体は黄褐色で, 頭部の中央に不明瞭な黒小円紋があり, 前胸背前縁は幅狭く黒色となる。翅鞘は黒褐色で, 両側は幅広く波状に, 各中央は長楕円形に黄褐色。

検視標本: 2 exs., Gônodo-ike, Aichi Pref., 2. v. 1962, Y. TAKASAKI; 3 exs., ditto, 9. vi. 1963, Z. NARUSE; 1 ex., ditto, 9. vi. 1963, M. SATÔ (New to the fauna of Japan).

Hydrocoptus (Hydrocoptus) subvittulus

MOTSCHULSKY チビコツブゲンゴロウ (新称)

Hydrocoptus subvittulus MOTSCHULSKY, 1859, Étud. ent., 8: 43 (Colombo).*Hydrocoptus (Hydrocoptus) subvittulus*: M. SATÔ, 1972, Anns. hist.-nat. Mus. natn. hung., 64: 144, fig. 2.

分布: 琉球列島 (伊是名島, 西表島), 中国, ベトナム, スリランカ, インド, スマトラ, ジャワ。

東南アジアで水田などに普通な種であるが, 今回琉球列島から始めて記録されるものである。

体長 2.4 mm。全体黄褐色で, 翅鞘はやや濃色となるが, 両側, 翅端部および基部 1/3 辺りの斜に長い帯紋は不鮮明に淡色。

検視標本: 7 exs., Mitara, Iriomote-jima, 8. viii. 1962, M. SATÔ et Y. ARITA; 1 ex., Jitchaku, Izena-jima, 4. viii. 1978, Y. KUSUI (New to the fauna of the Ryukyus). (名古屋女子大学)

○青森県十二湖のミズギワゴミムシ (ミズギワゴミムシ分布資料 5)

流れの水辺にすむ種類は個体数も多く広く分布するものが多い。一方, 止水域にすむ種類の分布に関しては調査が充分とはいえない。そこで特に珍しい種類が得られたわけではないが, 青森県十二湖の調査結果を報告しておくたい。

20. vi. 1979, 青森県十二湖, 筆者採集。

1. ウスオビコミズギワゴミムシ *Paratachys sericans* (BATES), 10 頭。
2. セダカコミズギワゴミムシ *Elaphropus nipponicus* (HABU et BABA), 1 頭。
3. ウスモンコミズギワゴミムシ *Tachyura fusci-cauda* (BATES), 2 頭。

コミズギワゴミムシ類は, 従来 *Tachys* 一属として扱われてきたが, 丘孔点列の排列状態, 翅端溝の位置, 下唇茎節の眼状孔の有無など, 多くの特徴により比較的にいくつかのグループに分けられる。そのため最近では, いくつかの属に分割する方法が試みられ支持される傾向にある。筆者も同意見でありここでは ERWIN や KRYZHANOVSKY の論文を参考に属をとり扱ってみた。なお *Eotachys* は ERWIN により *Paratachys* のシノニムとされていた。また *Tachyura* を *Elaphropus* に含める考えもあるが, 区別しておいた方がよいと思う。

4. ヒメマダラケンミズギワゴミムシ *Bembidion octomaculatum* (GOEZE), 4 頭。

5. ガロアミズギワゴミムシ *B. galloisi* NETOLITZKY, lex. (東京都港区, 森田誠司)

○増富温泉のチャイロコガネ

1984年5月26~27日にかけて, 山梨県増富温泉付近において採集されたチャイロコガネについて報告する。

1. オオタケチャイロコガネ *Sericania ohtakei* SAWADA, 6♂♂, 2♀♀が採集されたが, このうち7頭までは, 灯火採集によって得られた。
2. セスジチャイロコガネ *Sericania suturalis* NOMURA, 1♂, 1♀。増富温泉よりやや標高の高い金山付近のカラマツ植林地に残ったオオバヤシャブシと思われる樹上でビーティングによって得られた。
3. キラチャイロコガネ *Sericania kirai* SAWADA, 1♂, 1♀。
4. ツヤチャイロコガネ *Sericania fulgida fulgida* NIJIMA et KINOSHITA, 2♀♀。
5. ヨツバチャイロコガネ *Sericania quadrifoliata* (LEWIS), 1♀。

末筆ながら, 本稿を書くにあたり, 貴重な標本を恵与下さった, 東京農業大学昆虫学研究室の諸氏にお礼申し上げます。(東京都練馬区, 小林裕和)

いわゆる“チュウジョウアオゴミムシ”について

笠原 須磨生

チュウジョウアオゴミムシ *Chlaenius* (*Lissauchenius*) *chuji* JEDLIČKA は、台湾の台北産 1 雌の標本に基づいて 1946 年に記載されたアオゴミムシである。わが国で本種とされるものを初めて屋久島から記録した佐藤 (1972) は、写真をそえてその姿形を紹介し、笠原 (1980, 1981) は八重山諸島の与那国島と石垣島に産することを報告した。また、HABU (1981) は、屋久島産 1 雄と沖縄島産 1 雌の標本に基づいて詳細な再記載をおこない、日本産の個体には原記載と異なる点があって、それが地理的変異によるものか否かは証明できないと述べている。

しかし、*chuji* の原記載に付された全形図は、日本産“*chuji*”とはいささか異なるものであって、HABU (前出) が相違点として挙げた頭部と前胸背板の側縁の色彩や体長のほかにも、原記載によれば、上翅の長さは前胸背板の長さの 2.5 倍；斑紋の位置は“placeé à peu près du milieu”とあるように上翅の中央近くにあるが、日本産“*chuji*”の上翅は長く、前胸背板の長さの 2.8 倍；斑紋は明らかに後方であって、中央よりとはいいがたい。さらに、石田正明氏のご好意で検することのできた台湾の南山溪産 1 雌の標本(図 4)は、色彩はもとより体形も原記載とよく一致するもので、これを *chuji* とすれば日本産“*chuji*”は明らかに別種といわざるをえない。

ところで、*chuji* の所属する *Lissauchenius* 亜属は、MACLEAY (1825) がジャワから *ruffemoratus* を記載するにあたって、これを模式種として創設したもので、はじめヨツボシゴミムシ属 *Panagaesus* の亜属とされていたものである。MACLEAY の原記載は簡単なものだが、大英博物館(自然史)に保存されている模式標本の 1 雄について ANDREWES (1919) が詳しく再記載をしており、これと彼のジャワ産アオゴミムシ属の検索表 (1941) をあわせて参照すると、日本産“*chuji*”は肢の色彩を除けば、むしろこの *ruffemoratus* MACLEAY によく合致する。そこで、折から渡欧されるところであった名古屋

女子大学の佐藤正孝教授にお願いして、台湾産 *chuji* と日本産“*chuji*”の標本を大英博物館にある *ruffemoratus* の模式標本と比較し、その写真を撮影してきて頂くことにした。その結果、やはり日本産“*chuji*”は *ruffemoratus* と同じか、少なくともその地方型とみてよく、台湾産 *chuji* は JEDLIČKA が原記載中に述べているように、ANDREWES に異同を問い合わせた *C. (L.) medioguttatus* CHAUDOIR により近縁であることが、*medioguttatus* のいくつかの標本写真によって判明した。

C. ruffemoratus の模式標本(図 1)は、上翅が少し開いているためもあるが、日本産のものより幅広く見えるが、体長 11 mm、体幅 3.5 mm で日本産と大差なく、色彩や頭部と前胸背板の形状、上翅の斑紋の位置、とくに第 6 間室で後方にやや突き出している形なども日本産の個体とほぼ同じである。脛節と跗節が黒く、日本産がおおむね黄赤褐色である点は異なるが、八重山産の個体には後肢が暗化しているものもあり、台湾の天祥産 1 雄の標本は、後脛節が暗色をおび、後跗節は黒褐色で、肢の色彩は地域的に変化があるものと思われる。

残念ながら基産地やその周辺の標本が入手できないので、日本産個体との細部にわたる異同を検討し、亜種として区別すべきか否かを決定することはできないが、以上の結果から日本産“*chuji*”は *ruffemoratus* MACLEAY と同定し、和名も HABU (前出) が与えた「ホソキボシアオゴミムシ」をもちいて真のチュウジョウアオゴミムシ *chuji* JEDLIČKA と区別すべきだと思うので、以下のように整理しておくことにする。

本稿に関し、いつもながら懇篤なご指導を賜った国立科学博物館の上野俊一博士、ならびに滞欧中の貴重な時間をさいて標本探査と撮影の労をとられ、多大なご援助を賜った名古屋女子大学の佐藤正孝教授に心から感謝の意を表したい。また、貴重な標本をご恵みくださった石田正明、西山 明、庄田達己の諸氏に厚くお礼申しあげる。



図1(左). ホソキボシアオゴミムシ *Chlaenius* (*Lissauchenius*) *ruffemoratus* (MACLEAY), 模式標本, ジャワ産 (大英博物館)。佐藤正孝撮影

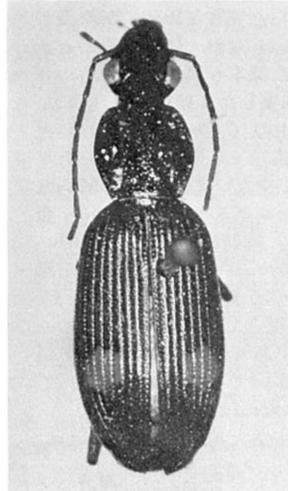


図2(右). 同, 奄美大島産, 1895年 FERRIÉ 採集 (バリ自然史博物館, OBERTHUR コレクション)。佐藤正孝撮影

ホソキボシアオゴミムシ *Chlaenius (Lissau-
chenius) rufifemoratus* (MACLEAY)

Panagaeus (Lissauchenius) rufifemoratus MACLEAY, 1825, p. 13, t. 1, fig. 1 (Java). *Chlaenius (Lissauchenius) rufifemoratus*: CHAUDOIR, 1856, p. 198; 1876, p. 35. —ANDREWES, 1919, pp. 136, 137; 1941, p. 303. *Chlaenius (Lissauchenius) rufifemoratus*: CSIKI, 1931, p. 937. *Chlaenius chujoi* [sic]: 佐藤, 1972, p. 34. *Chlaenius chujoi*: 黒沢, 1975, pl. 7. —笠原, 1980, p. 6; 1981, p. 65, pl. 7, fig. 1. *Chlaenius (Chlaenius) chujoi*: HABU, 1981, pp. 16-19, figs. 4-8.

雄の下唇鬚末端節は基部が内方へ強く屈折し、斧形。外縁は幅広く、その全面が深く凹む舟状の特異な形態で、本種と亜属の標徴として重要である(図3)。本種はアオゴミムシ類としては生態的にも変っていて、しばしば草木上に見られ、叩き網で採集されることを黒沢(1975)と笠原(1980)が報告している。個体数は多くない。なお、佐藤教授がバリ自然史博物館で撮影された標本写真の中に、FERRIEが1895年に奄美大島で採集した1頭があり(図2)、OBERTHÜR コレクション中の *C. medioguttatus* と同じ所に保管されている由。

国外での本種の記録は少ないようだが、MANDL(1978)は、ヒマラヤのシッキムとその周辺から亜種 *bhutanensis* を記載し、同時に *C. lynx* CHAUDOIR を本種の亜種としてカトマンドゥーから記録している。しかし、*lynx* は HABU(1982)が *C. bimaculatus* DEJEAN の亜種としたように *rufifemoratus* とはまったく別種であり、台湾アトボシアオゴミムシの和名でわが国でも琉球から知られているもので、MANDL の処置には納得できない。

分布: 屋久島, 琉球(奄美大島, 沖縄島, 石垣島, 与那国島); 台湾, ジャワ, タイ, インド。

檢視標本: 2 ♀♀, 11. iv. 1980; 1 ♂, 13. iv. 1980, 与那国島宇良部岳。1 ♂, 26. iv. 1980, 石垣島於茂登岳, 以上筆者採集。1 ♀, 21. iv. 1977, 石垣島於茂登, 庄田達己採集。1 ♂, 29. v. 1980, 台湾天祥, 西山 明採集。

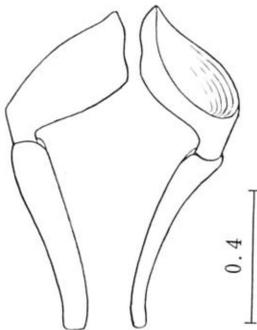


図3. ホソキボシアオゴミムシ *C. (L.) rufifemoratus* (MACLEAY), ♂ の下唇鬚。

チュウジョウアオゴミムシ *Chlaenius (Lissau-
chenius) chujii* JEDLIČKA

Chlaenius (Lissauchenium) Chujii JEDLIČKA, 1946, p. 4, pl. 1, fig. 2 (Taihoku).

雌。体長 10.3 mm。体幅 3.5 mm。頭部は赤銅光沢が強く、前胸背板は光線の向きによって緑銅か赤銅色に光る。側縁は細く褐色。側縁溝にそって青緑銅色に光る。上唇と大腮、柄節と末端部を除く触角、腿節先端部、脛節、跗節は暗褐~暗赤褐色。腿節は黄赤褐色。前胸背板は前種より丸く、より強く前後

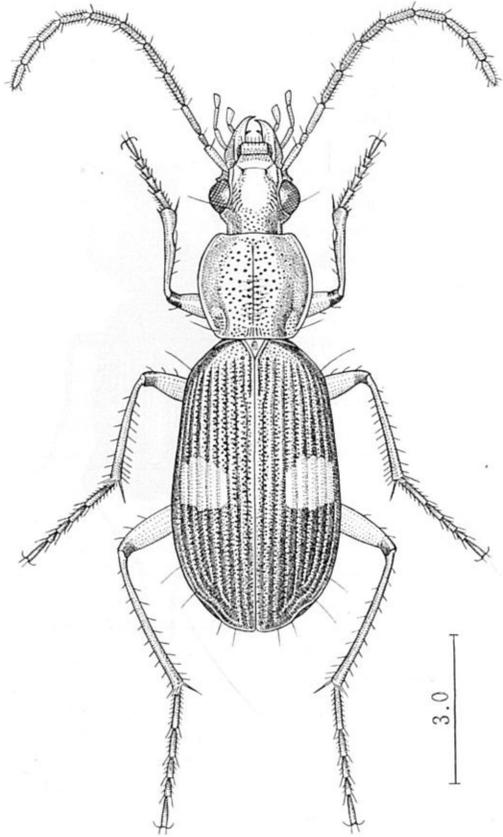


図4. チュウジョウアオゴミムシ *Chlaenius (Lissau-
chenius) chujii* JEDLIČKA, 台湾南山溪産 ♀。

に狭まり、後角はより鈍く、丸い。頭部と前胸背板の点刻は前種によく似ている。小楯板は中央が凹む。上翅は前胸の長さの2.56倍(前種は2.75倍)。長さは幅の1.7倍(前種は1.83倍)。間室の点刻は前種より大きく、密。斑紋は上翅のほぼ中央、第4~8間室にある。腹部腹板末節の後縁は、両側が湾入し、前種に似ている。近縁の *medioguttatus* CHAUDOIR は、前胸背板が緑銅色。基方へより強く狭まり、後角がさらに鈍い。肢は黄褐色。

分布: 台湾。

検視標本: 1 ♀, 20. v. 1974, 台湾南山溪, 杜欽竜採集。

参考文献

- ANDREWS, H. E., 1919. On the types of oriental Carabidae in the British Museum, and in the Hope Department of the Oxford University Museum. *Trans. ent. Soc. Lond.*, 1919: 119-217.
- 1941. Papers on Oriental Carabidae XXX-VII. *Ann. Mag. nat. Hist.* (11) 7: 307-317.
- CSIKI, E., 1931. Carabidae: Harpalinae 5. In JUNK & SCHENKLING, *Coleopterorum Catalogus*, pars 115: 739-1022. W. Junk, Berlin.
- CHAUDOIR, M. DE, 1856. Mémoire sur La famille des Carabiques 6^e partie. *Bull. Soc. imp. Natur. Mosc.* 29: 187-291.
- 1876. Monographie des Chléniens. *Ann. Mus. civ. Stor. nat. Genova*, 8: 3-315.
- HABU, A., 1981. On two species of Callistini from Japan (Coleoptera, Carabidae). *Ent. Rev. Japan*, 35: 13-20, figs. 1-8.
- 1982. On *Chlaenius lynx* CHAUOIR (Coleoptera, Carabidae). *Ibid.* 37: 263-279.

- JEDLIČKA, A., 1946. Description des Carabides Nouveaux des l'Asie Orient: 1-16, pls. 1-2. Praha.
- 笠原須磨生, 1980. ススキの歩行虫 2種. 甲虫ニュース, (52): 6.
- 1981. 八重山諸島で採集した歩行虫類 2. 北九州の昆虫, 28: 59-68, pls. 7-8.
- 黒沢良彦, 1975. チュウジョウアオゴミムシの習性. 甲虫ニュース, (29/30): 7.
- MACLEAY, W. S., 1825. No. 1 of Annulosa javanica, or an attempt to illustrate the natural affinities and analogies of the insects collected in Java by T. Horsfield: 1-50. London.
- MANDL, K., 1978. Neue und wenig bekannte Formen der Subfamilie Callistinae (Col. Carabidae) aus dem Himalaja-Gebiet und den benachbarten chinesischen und indo-chinesischen Raum. *Ent. Basil.*, 3: 263-279.
- 佐藤正昭, 1972. 屋久島で発見・採集された日本未記録のチュウジョウホソアオゴミムシについて. 昆虫と自然, 7: 34.

(千葉県船橋市)

○訂正と補遺

筆者らは本誌62号(1983)に、「コウトウチビクワガタについて」と題して蘭嶼産の *Figulus fissicollis* FAIRMAIRE を記録、解説したが、その後いくつか気付いた点があるので補足しておく。

まず、本種とは直接関係ないが、蘭嶼に産するクワガタムシ科甲虫の中で、オニツヤクワガタ *Odonotolabis siva* HOPE については触れなかった。これはすでに CHÛJÔ (1940) の記録があるものの、疑問種として半ば黙殺していた慣習に従った扱いをしたものだが、最近、同島における確実な分布が確認され、本誌63号に田中和夫氏も報告している。

次に、コウトウチビクワガタに関する記録だが、拙稿の中では2編を引用し、特に本種の蘭嶼初記録となった MIWA & CHÛJÔ (1936) の目録の所で、それ以外の報告は見あたらない旨を記した。しかるに目録発行よりおよそ1年後に鹿野忠雄博士自身によっても記録、図示されており、筆者らは迂闊にも引用しなかった。鹿野博士は、*Figulus laticollis* REICHE を 66, iv. 1936. のデータと共に記録しており、これは MIWA & CHÛJÔ のデータ (May, 1936) と食い違うものの、恐らく同一の標本と思われる。また、図を検討するとやはり筆者らの示した *fissicollis* の特徴とよく一致しているので、平山 (1939) の報告以前に、すでにコウトウチビクワガタと称すべき甲虫の存在は判明していたわけである。従って、筆者らの報告における本種の扱いに変更はないが、参照しなかった怠慢はお詫び申し上げる。末筆ながら、文献について御教示いただいた鹿児島大学の中根猛彦博士に御礼申し上げる。

参考文献 (前報で引用したものを除く)

- KANO, T., 1938. Contribution to the knowledge of the Coleopterous fauna of Kôitôsho (Botel Tobago). *Annot. zool. Japon.*, 17: 113-119. 2 pls.
- CHÛJÔ, M., 1940. Contribution to the Coleopteran fauna of Kôitô-syo (Botel-Tobago Is.), Formosa. *Trans. nat. Hist. Soc. Formosa*, 30: 8-13.
- 境野広行, 1983. オニツヤクワガタの蘭嶼における分布について. 月刊むし (154): 42.
- (東京都港区, 境野宏行・兵庫県川西市, 越智輝雄)
- タマムシ類3種の加害植物
- 過日, 細川浩司, 助永隆雄両氏より各地産の材中より羽化脱出したタマムシ類の標本を頂戴したが、その中に記録するに値するもの若干があるので、以下に報告しておく。貴重な標本を頂いた上記両氏に深く感謝する。
1. ムツボシタマムシ *Chrysobothris succedanea* E. SAUNDERS, 1873. 2頭, 奈良春日山, iv. 1983. 細川浩司採集。1983年4月26日採集のイヌンデ材中より羽化脱出。
 2. クワナガタタマムシ *Agrilus komareki* OBENBERGER, 1925. 1頭, 福岡県英彦山, 23, iv. 1982. 助永隆雄採集。1981年5月5日採集のハイノキ材中より羽化脱出。従来の記録はクワとハルニレであるが、ハイノキの記録は今回が最初である。
 3. アオグロナガタタマムシ *Agrilus viridiobscurus* E. SAUNDERS, 1873. 1頭, 愛知県豊田市山中, 24, iv. 1983. 細川浩司採集。ヒメヤシヤブシの材中より羽化脱出。(兵庫県神戸市, 伊藤 武)

○ムツキボシツツハムシの採集例

ムツキボシツツハムシ *Cryptocephalus ohnoi* KIMOTO は、最近新種として記載されたツツハムシで、上翅の斑紋はキボシツツハムシ *C. perelegans* BALY に非常に良く似ている。原記載に使用された標本は山梨県増富と東京都大岳山のそれぞれ 1 個体ずつであるが、筆者は後者の大岳山に近い御岳山の本種の標本を所持しているので記録しておくたい。

1 ♀, 東京都青梅市御岳山 (標高 700 m 付近), 29. vii. 1977, 新里達也採集。広葉樹の生葉のスイーピングで得たものであるが、採集直後に付近を集中的に探したにもかかわらず追加個体は得られなかった。(東京都板橋区, 新里達也)

○クワガタムシの寄生蜂

過日, 中村芳樹氏のお宅にお伺いした折に、オオクワガタの幼虫についていた繭から羽化したと云うツチバチ科の 1 種の標本雌雄を頂きその繭を見せて頂いた。ツチバチ科の種類はいずれもコガネムシ科の幼虫を狩る狩人蜂であるが、今までにクワガタムシ科の幼虫を狩ると云う報告はない。クワガタムシ科もコガネムシ科も同じ鰓角類 (Lamellicornia) に属するから当然ではあるが、ツチバチ科の蜂がクワガタムシ科の幼虫も狩ると云うことは、クワガタムシ科も場合によっては広義のコガネムシ科に含め得ることを示している。これは極めて重大な事実である。帰宅後早速このツチバチ科の 1 種の種名を調べた結果、次の種類であることが判明した。

アカスジツチバチ *Scolia (Carinoscolia) fasciata* SMITH

1 ♂, 山梨県北巨摩郡明野村, 7. vi. 1982, 羽化 (東京), 中村芳樹採集; 1 ♀, 同上, 25. vi. 1982, 羽化 (東京), 中村芳樹採集。

ツチバチ科に属する蜂は寄生蜂と云うよりは、むしろ原始的な狩人蜂で、土中に潜りコガネムシ類の幼虫を探し当てた雌蜂は幼虫を麻痺させてその体表に産卵、やがて癡睡から覚めた幼虫は卵を背負ったまま活動するが、卵から孵化した幼虫はコガネムシの幼虫を食べて成長し、やがて繭を造って蛹化する。オオクワガタの幼虫は比較的硬いクスギなどの朽木中に生育するが、アカスジツチバチの雌がどのようにして目的の幼虫を探り出し産卵するのか、その機構を知りたいものである。

(国立科学博物館, 黒沢良彦)

○キョウトコチビンデムシの雄交尾器について

キョウトコチビンデムシ *Sciodrepoides tsukamotoi* NAKANE は、1956 年に京都貴船を模式産地として記載された種である (西京大学学術報告, A, 2: 160, pl. 1, figs. 8-12)。本種の雄交尾器は、中片が槍形で太く、多少非対称に頂部前でふくらみ頂点は基部においてかなり肥大して基片を取り巻いている。

筆者は、この側片先端の細毛が図のような状態となっている丹沢産、高尾山産の計 3 雄を観察している。原記載には雄交尾器が図示されているが、文章上の記載はなく、図示された側片先端の細毛も各 1 本である。また HAYASHI (1969) は奄美大島からハヤシコチビンデムシ *S. dubius* Y. HAYASHI を記載した際、本種に近いことを述べ比較を行っているが、この点にはふれられていないので、あるいは交尾器の異常なのかも知れない。試みに他の個体の雄交尾器を手持ちの実体顕微鏡で 160 倍程に上げて検鏡してみたが、互いに密着して一見 1 本のように見え、実は同属のアルプスコチビンデムシ *S. alpestris* JEANNEL のように 2 本あるものなのか否かは判然としなかった。

ただし世界中の種を対象にチビンデムシ科の新種記載、再記載を精力的に行っている Dr. SZYMCAKOWSKI の論文にも新種記載では細毛を 2 本に図示し、その再記載では 1 本などという事例もあり、それほど重要な標徴ではないのであろう。以上のように甚だ不十分な観察ではあるが、とりあえず図を付して報告しておくたい。

(神奈川県綾瀬市, 西川正明)

甲虫談話会

会費 (一ケ年) 2000 円, 次号は 11 月下旬発行予定。

投稿締切は 10 月 20 日

発行人 黒沢良彦

発行所 甲虫談話会 東京都台東区上野公園

国立科学博物館動物研究部内

電話 (364) 2311, 振替東京 0-60664

印刷所 創文印刷工業株式会社

昆虫の器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめてできた有頭昆虫針!!

1, 2, 3, 4, 5 号 (各号 100 本 180 円)

なお、有頭針 00, 0 号もできました。その他、採集、標本整理用各種器具も取揃えてあります。

〒 150 東京都渋谷区渋谷 1 丁目 7-6

電話 (03) 409-6401 (ムシは一ばん)

振替 東京 21129

志賀昆虫普及社

タツミの昆虫採集器具

ドイツ型標本箱 木製大 ¥ 5,000, 桐合板製インロー型標本箱中 ¥ 1,700, 送料一箱につき都内及第一地帯: 3 個以下 ¥ 1,300, 4 個以上 ¥ 850 (以下同様), 第二地帯 ¥ 1,500, ¥ 950, 第三地帯 ¥ 1,700, ¥ 1,050, 其他, 各種器具, 針などを製作販売します。カタログを御請求下さい。(¥ 60)

タツミ製作所

〒 113 東京都文京区湯島 2-212-25

電話 (03) 811-4547, 振替 6-113479